

# 教養的教育について…

## ある日の研究室

文・羽田 貴史



プロフィール

(はた・たかし)

一九五二年 北海道生まれ

大学教育研究センター助教授

一九七九年 北海道大学大学院教育学研究科

中退

専門 大学財政・経済論、大学史。大学に関する  
ことなら何でも関心があります。

三年生A…先生、こんにちは。

教員…やあ、今日はどうしたの。

学生A…実は、高校の後輩が今年入学したんですが、一般教育が大きく変わったとまどっているんです。先生にお聞きすればわかるかと思ってきましたが。

新入生B…はじめまして。

教員…ボクもよくわからないことが多いんだが。

三年生A…何が一番大きい変化ですか。

教員…いろいろあるが、一番は、今まで総合科学部という学部だけで一般教育を担当し、一、二年生の時期に集中していたのを、各学部も担当して、四年間にわたってやることだろうね。

三年生A…学部の先生は、専門中心で研究や教育をしていると思うんですが、一般教育に

ふさわしい内容ができるんですか。

教員…それは中味次第というところだ。大体、教養というのは、長い時間がかかって育つものだ。一、二年生の時期だけだと、浅い上にどうしても専門教育の前段階というイメージが強くなる。京都大学も「高度一般教育」なんて言っている。カリキュラムとしては四年間にまたがる方がいいと思うね。それにすべて学部の教員が担当というわけじゃない。中心はやはり総合科学部の先生だ。まあ、今まで総合科学部の先生に頼り切りだったのを、自分たちでも教養とは何かを考えていくということだろうね。

一年生B…名称も「教養的教育」と変わったんですね。「一般教育」とどこが違うんですか。

教員…「一般教育」というのは、General Educationの訳語なんだが、日本語の「一般」というのは、あまりよい意味には使わない。「君の言うことは一般的だ」なんてね。

三年生A…一般大衆なんて言いますね。

教員…本来の「普遍的」とか「共通」という意味合いが薄れてしまう。それに、学問は、教養が専門か、と単純に分けられるもんじゃない。

一年生B…それで「教養的教育」「専門的教育」としたんですね。

三年生A…目玉は何ですか。

教員…少人数教育の場として「教養ゼミ」を設けたこと。いままでも人文科学、社会科学、自然科学の系列ごとに均等に履修していたのをやめて、まとまりのある科目を関連づけてパッケージ科目を作ったこと。情報科目を共通科目として設けたこと。総合科目を必修にしたこと、などかな。

三年生A…盛りだくさんですが、講義の内容がそんなに急に変わるものですか。

教員…長い時間をかけて改革の準備をしたから、それなりに充実していると思うよ。

一年生B…私、大学の勉強ってどんなのか心配なんです。ついていけるのかしら。

教員…入学試験を突破した人なら大丈夫だよ。ただ、高校までの勉強は、学級ごとに担任がいて、教科書も決まっているからマニュアル的に勉強していればよかったですね。大学の勉強は、言い古されたことだが、主体性が必ずやだし、自由がある代わりに責任もある。いわば、大人として扱われる違いがある。その

違いに気がつくかどうかだね。

三年生A…ぼくは、教養ゼミに関心があるんです。こんな科目が一年からあつたらよかったですね。だって、せつかく入学しても大教室の講義で時間も長いし、大学での学習の仕方がよくわからなかったんです。

教員…そうだね。うっかりすると、試験だけ通って単位さえもらえれば、ということになりやすいからね。ボクは、勉強というのはコミュニケーションだと思っている。過去に生きた人間や現代の人間、異文化に育った人間から学ぶということだね。しかし、生身の人間同士の対話ができないのに、本当の理解が成立するはずはない。本を読むことや実験・観察も大事だが、どれだけ他人と対話できるかという意味でも教養ゼミはボクも楽しみなんだ。

三年生A…かなり模様替えることはわかりましたけど、学生にはどうしても一般教育はイメージ悪いですよ。いっそのこと教養教育みたいなのはなくしてみたらどうですか。

教員…いや、そんなことはない。科学技術が高度に発達して、逆に現代社会は行き詰まっているんじゃないのかな。オウム真理教や薬害エイズ問題などみていると、知識を追求するだけでなく本当の人間の賢さについて考えなければならぬと思うよ。大学の教員だからといって、そういう意味での賢さがあるというわけでもない。教養的教育は、教員が若い世代の君たちと対話しながら、これからの教養を手探りで生み出して行く場になれば、とひそかに期待しているんだ。あとは、コーヒでも飲みながら話そうか。

学生A、B…(うなずく)